

山路愛山

「平民主義」歴史家の新島観

西田 毅

(大学名誉教授)

●生涯と思想

明治の代表的な歴史家・ジャーナリスト山路愛山（1865・1・23—191



山路愛山

7・3・15)と同志社の関係に入る前に、その生涯と思想を概観しておきたい。

山路愛山（本名弥吉）は、1865年（元治元）12月に江戸浅草鳥越の天文方屋敷で父山路一郎、母けい子の長男として生まれた。愛山の家は明和以来、代々幕府の天文方をつとめる御家人であった。明治維新後の1869年（明治2）、静岡へ無禄移住、父一郎は榎本武揚の軍に加わり出奔、実母とはすでに死別し、祖父母の下で暮らした静岡での生活は経済的に困苦をきわめたという。

愛山の人間形成にとって父の存在感は

『将来之日本』が出るど熟読、翌年民友社が結成され、『国民之友』が創刊されるとこれを越前の足羽山上で読んで感動し、早速、東京の蘇峰にあてて書簡を出した。愛山が社会的実践活動に乗り出したのは、1887年、静岡キリスト教青年会の名で「青年夜学会」を結成、英語、漢学、算術などを無料で教え始めたことに端を発するようである。その後、「静岡職人会」、「職人改良会」なども組織し啓蒙に努めた。翌年には高木壬太郎らと『静岡青年会雑誌』を創刊、文筆家としてのスタートを切った。

「頼山陽ハ徳川氏ノ忠臣ナリ」（『博聞雑誌』明治21年）が中央の雑誌に掲載された最初の文章である（岡利郎編『山路愛山集』（一）「解題」参照、三二書房、1985）。

徳富蘇峰をはじめて訪ねたのは、1889年（明治22）のことであった。しかし、直ちに民友社への入社が実現したわけではない。その間、平岩の世話で東洋英和学校に入学し、北村透谷の「楚囚之詩」を読んだり、東洋英和で開かれた内村鑑三の演説に感動したりしている。

1890年（明治23）、東洋英和学校を中退し、伝道活動のため、静岡県袋井に移り住む。この年から『女学雑誌』に文章を掲載、本格的な執筆活動に入った。蘇峰の『国民新聞』に始めて寄稿したのが民友社系の作家宮崎湖処子を論じた「湖処子に与ふ」である。民友社に入社したのは1892年（明治25）8月、愛山27歳のときであった。袋井教会で約1年間、牧師をつとめた後のことである。なお、前年にはメソジスト三派の機関紙『護教』が創刊され、主筆に迎えられている。

これ以後1897年に民友社を退社するまで、『国民新聞』、『国民之友』両紙を舞台に精力的に歴史論や文学論を発表し、この間に「頼襄を論ず」を発表して有名な「人生相渉論争」が北村透谷らとのあいだに展開された。民友社を去った後、毛利家編纂所に入り『防長回天史』編纂に従事する。明治社会主義者堺利彦と知り合ったのはこの頃である。盟友竹越三又主筆の『世界之日本』にも数編寄稿している。

2年ばかり、フリーのジャーナリスト

薄く、幼少時代に祖父金之丞からうけた影響は大きくその性格形成に関わっている。私立学校の助教をつとめて僅かな収入を得るが、生活苦もあって、静岡県警察本署の小吏となって糊口をしのいだ。1883年（明治16）、静岡県英学塾後の教頭渋江保からミルの「自由論」やスペインサーの「教育論」を学んだ。翌年、平岩宜保が日本メソジスト静岡教会牧師として着任し、その平岩から英語を学び、やがて受洗する。

1886年（明治19）、徳富蘇峰の

を経験したが、やがて蘇峰の紹介で『信濃毎日新聞』の主筆に就任する（1899）。信州では多忙な新聞業務のほかに、各地の青年会、婦人会に招かれて、「憲法擁護」や普通選挙運動などの政治論や歴史論を講演している。中村太八郎らの推進する普通選挙同盟会に参加したのは1902年（明治35）のことであった。1903（明治36）年1月1日、『独立評論』を創刊、自ら社主になって独立した言論人としての活動を始めた。新聞人としての彼の抱負は、「倫理と道徳に関する時代思潮」への強い関心と不偏不党のスタンスの堅持にあった。創刊号には盟友蘇峰や三又、宮崎湖処子、塚越停春ら旧知の友人がそろって寄稿し、何となく『国民之友』再来の観ありとの世評があった。『独立評論』はその後、休再刊をくり返しながら亡くなる前年の1916年8月まで続いた。

また、斯波貞吉、中村太八郎、山根吾一らと国家社会党を結成（1905）し、日本社会党と協力して、東京市電の電車賃値上げ反対運動を組織する（1906）など、政治社会運動の実践にも熱心に参

加した。

日露戦争期の愛山は、国家社会主義と社会的帝国主義の立場からマルクス主義の二元論（紳士階と平民階）を排して、国家、紳士階、平民級の三階級論的社会主義を主張した。すなわち、国家社会主義は、愛山のみどころ「日本流の社会主義」の謂であり、これぞまさしく「科学的社会主义」なのであった。

明治40年代に入ると早稲田大学や慶應義塾大学で、日本思想史や国史（古代史）を担当、そして、1912年（明治45・大正元）4月から、同志社大学政治経済部の講師となり、日本国史を担当している。「大正元年度同志社報告」によれば、当時、同志社には正課外の講義として、内外の学識者を招待して行われる「科外講演」というプログラムがあり、愛山が講師として演壇に立った記録が残っている。すなわち、1913年6月以降、「日本国史」を毎学期一回政治経済部で開催すること、1914年5月9日、1915年10月23日に「日本国史」、そして1916年5月20日に「日本国史」、同年11月25日には、「日本歴史と世

界の歴史」を講演した。非常勤講師としての講義担当は、死の前年の大正5年度まで毎年継続された。最晩年の愛山の歴史的関心がどこにあったか、これらの記録から推測できよう。

1917年（大正6）3月に入って体調を崩し、下痢症状が治らず、赤痢と心臓病を併発してついに不帰の客となった。彼は親友の蘇峰に後事を託し、辞世の一句「この娑婆はとも去られぬ世なれども生まれぬ先の国へ行かなむ」を残して死去した。享年52歳。

多作の彼は多くの名著や評論を残した。『荻生徂徠』（明治26）、『新井白石』（明治27）、『勝海舟』（明治32）、『孔子論』（明治38）、『社会主義管見』（明治39）、『現代日本教会史論』（明治39）、『支那思想史・日韓文明異同論』（明治40）等の著書によって、歴史家愛山の本領が遺憾なく発揮された。ほかに、『国民新聞』、『国民之友』、『信濃毎日新聞』、『太陽』、『独立評論』、『護教』などに多数の評論がある。

なお、愛山没後、大原孫三郎の寄贈による「山路愛山文庫」が本学に設置され

本地に耶蘇教の訓練を加へたるに在り、「耶蘇教の訓練を受けざる前に於て既に日本武士の醇乎たるもの」であつたことを強調する。

この「武士道的キリスト者」という捉え方は、徳富蘇峰にも共通する考え方である。吉田松陰との対比で新島を理解するのも、蘇峰らと共通している。愛山がいう新島の醇乎たる「日本武士」の特質は、武士としての品位であり、体面の維持であった。すなわち、「雄心烈士の壮士」の資質に加えて、「面目を重んじ、独立を尊び、気節を挫かざる」道徳が渡米する前にすでに形成されており、それを土台にキリスト教徒となった新島が米国流の熱心な自由、民政の信奉者になったとみる。このような「武士道的キリスト者」観は、一人新島だけでなく、内村鑑三、新渡戸稲造ら明治初年のキリスト者について広く冠せられる形容詞であった。しかし、脱国に失敗した吉田松陰との比較は、新島にのみ当てはまる論法であった。

「米国的自由独立の精神」のあらわれとして、愛山が引用するエピソードは、

た。「1917年度同志社社長報告」（原田総長筆）によれば、それは和漢書3267冊、洋書301冊、計3568冊の分量からなり、本年度最重要の寄贈書籍で日本歴史の好資料多数が取められているという記述がある。大学令による同志社大学として、研究設備の充実に余念のなかつた当時、本文庫の設置は貴重な収穫であつたことは想像に難くない。この「愛山文庫」は、のちに大久保利謙が「同志社大学の愛山文庫を訪ふ」と題して『明治文化』16巻5号（昭和18年5月）で紹介している。

●『現代日本教会史論』における新島襄・同志社大学設立運動観

本書『現代日本教会史論』（明治39）は、はじめ「現代思想史における基督教の位置」という題で『独立評論』に掲載された。後半の約三分の一は、警醒社から公刊された『基督教評論』に収められた。明治維新以後の日本精神史に関する論著であり、それはまた、愛山の代表的な同時代史論でもあった。標題から明ら

かなように、日本思想史といっても、本書は明治以後のプロテスタントイジズムを中心に据えた精神史である。維新政府のキリスト教政策の変遷、安井息軒の「弁妄」にみられる明治初期の排耶論の紹介、そして代表的なキリスト者として、中村正直、新島襄らを取り上げている。

本書で直接、新島と同志社を独立の章として取り上げているのは、「新島襄論」、「同志社大学の運動」、「新島襄の事業が有したる欠点」の三章である。ほかに、関連する章としては、熊本バンドを論じた「花岡山盟約」、「国民之友」及び『女学雑誌』がある。

愛山の新島観 文明開化の明治初年、長年のキリシタン禁制がようやく解けて、日本各地に教会ができ新しい信者が増えつつあるとき、あたかも、時代の要求に応えるかのように伝道を始めた新島のことを「成功したる吉田松陰」と愛山は呼んだ。

愛山の言わんとする趣旨はこうである。新島がキリスト教会の多くの伝道者の中で、異彩を放つのは、「有志家たる

岩倉使節団とワシントンで会つたとき、新島が、日本の旧来の慣習に従つた「長上の前に平伏頓首するの礼を取らず、却て米国風なる平民的の礼法を取らんと欲した」ことや、当日、同席した他の12名の国費留学生と同じ待遇を受けることを甘受できなかったことなどをあげている。さらに、プリント夫人（Orilla H. Hill）あての手紙で示した心配、つまり、森有礼の要請に従つて、ハーディー夫妻がこれまでに新島の教育に支出した経費の目録を提出し、日本政府が支弁するよいうなことがあれば、「政府の束縛を免るゝ能はざるに至らん。予は自由なる日本平民として主の御旨をなさんが為めに一身を献げまつらんのみ」の一節を例に出している。

同志社大学設立運動 新島が大学設立に向けて運動を展開した明治十年代後半から二十年代の始めは、まさに「欧化主義」たけなわの頃で、キリスト教の普及活動にとつて順風満帆の時代であった。しかし、そのような順調な時代風潮の中にあつても、新島の事業は「最も大胆なる計

山路愛山（やまじ・あいざん） 1865.1.23～1917.3.15

本名・弥吉。江戸浅草で、幕府の天文方を務める御家人の子として生れる。1883年、静岡英学塾で英語を学ぶ。1884年、日本メソジスト教会牧師として赴任してきた平岩^{よしやす}恒保から受洗。1887年、「国民之友」創刊号で、蘇峰の「嗚呼^{ああ}国民之友生れたり」を読み感動する。1888年、上京し東洋英和学校に入学。1892年、民友社に入社。1897年、末松謙^{けんちよう}澄が主宰する毛利家の「防長回天史」編集所に入る。1898年、『信濃毎日新聞』主筆。1903年、『独立評論』を創刊し死の前年まで継続。1905年、斯波貞吉、中村太八郎らと国家社会党を組織。赤痢を患い死去。

画」であつたと愛山はいう。

愛山曰く、当時の日本は「大学（東京大学―筆者注）及び文部省に隷属する所謂官学」と大限率いる専門学校（早稲田）、福澤の慶應義塾が教育界を横断する天下

陽の一布衣」（在野、無位無官の人―筆者注）、「孤独の伝道者」に徹する決意があれば、「流風余韻更に大なるものあり」と新島のために惜しんでいる。同志社が「外国宣教師の勢力範圍たる間はこれまらず」といい、官吏の手から自由にした教育を宣教師の手に渡してしまうのなら、それは五十歩百歩の違いに過ぎないではないかと手厳しい。この点、何人も依頼せず、独力を以てその教育事業を打ち立てた福澤諭吉の「独り群雄に卓然たる」功績を評価するのであつた。

新島研究者のあいだで、アメリカンボードの牧師として日本に帰国した新島が、外国伝道会社の方針に反して宣教師としての布教活動よりも教育事業に熱心で、あまつさえ大学設立運動にエネルギーを集中したのは一種の背信行為であると非難する論者がある。明治以来、一貫してみられる新島に対するネガティブな論評の典型といえるであろう。

愛山はそのような新島批判とは異なつた類型に属することは繰り返すまでもな

三分の状況にあり、キリスト教の教育は区々たるミッション・スクールを除いてその勢力は甚だ微弱であつた。そのような教育界の現状にあつて、新島は「基督主義の教育を以て日本教育界に一王国を画せんと欲」した。そもそも、日本の精神的教育に深い関心をほらつていた新島にあつて、教育と伝道は「精神的訓練の両面」であり、とりわけ、すぐれた人材育成のために教育の改善が急務という信念をもっていた。

一体、新島の教育目標はどこにあつたのか。それは帝国大学や官学が育成できない人材、すなわち、単に学問、技芸に秀でた人物でなく「真骨頂あり、枉ぐべからざる品性あるの人」の育成に力点が置かれた。そこで、新島のモットーは何よりもまず「官吏の手より教育を解放」することにあつた。しかも、新島の教育精神は早稲田や慶應義塾の私学の志と共通項をもちながら、「当世有用の人物」の育成に満足することなく、さらに、人をして「上帝の眼中に於て義とせらるゝ」、「より高尚なる生活世界」をめざす点で、慶應義塾派、専門学校派よりも

い。同志社が外国人宣教師団から物心両面で独立すべしというその見解は譲らないうが、さりとて、教育に熱意を示した新島の「聖なるエゴイズム」の追及や、教会合同運動に反対した新島の宗派主義的態度を咎めない。その意味で、愛山の姿勢は他者内在的批判の類型に属するものといえよう。眼光鋭いその新島のパーソナリティ分析を紹介してペンをおきたい。

「彼れ（新島）はその人となり寧ろ保守的なりき。（中略）彼は青年を煽動し若しくは青年に拜まれんには余りに開放

更に高き壇上に教育を祭らんとしたとその高遠な理想を強調している。

新島の事業が有する欠点 新島とアメリカンボードの関係を愛山はどのように見ていたのか。この点は多くの同時代人と同じく、厳しい批判の対象になっている。

大学設立運動の志半ばで倒れた新島に深い同情を寄せる愛山であつたが、その事業が「根底において大なる欠陥」をもつていたことも事実と指摘する。それは何か。外国の宣教師と事をともにした点にある。すでに、デイヴィスが記しているように、一部の外国人宣教師から、同志社がはじめから猜疑せられ、無用視せられ、反対と妨害の対象となつて、新島が苦しい思いをした。新島の側からすれば、宣教師グループは聖書教育に比重を置きすぎて、學術の教授を怠り、有為な青年たちの失望を招いたことに大きな不満があつた。そして、アメリカンボードが日本の現状に疎く、積極的に日本人伝道師の養成に熱意をもたなかつたのは遺憾であるという感情を強くもつていた。

しかし、もし、新島にはじめから「落的ならざりき。彼は物徂徠の如く快濶ならず、日蓮の如く放胆ならず、むしろその性情を抑へて外に表はさざる人なりき。されば彼は決して世人に好愛せらるべき性格をのみ有せざりき。否彼は時として世人に誤解せられたるのみならず、同じく基督教徒たるものにすらその心事を猜疑せられたることなきにあらざりき。されど彼は此の如く退一步的、抑遜的、非開放的の外衣の下に恐るべき熱誠を包みたりき。彼は何処にも友を作りうべき愛嬌者にあらざりき。されど彼は少数の友に熱愛せらるべき誠実を有しき」。

西田 毅（にしだ・たけし）

1936年大阪府生まれ。62年同志社大学大学院法学研究科政治学専攻修了、直ちに法学部助手に就任、専任講師、助教を経て74年から教授、77年大学院教授。法学部長、人文研所長など歴任、2007年名誉教授。オックスフォード大学、北京日本学研究中心、武漢大学、アモースト大学等の客員教授、研究員を勤める。日本政治学会、日本社会文学会理事等歴任。幕末から近代日本の政治思想を中心に日本政治思想史を専攻する。

主要著作として『竹越三又集』（三一書房 1985）、『近代日本政治思想史』（編著、ナカニシヤ出版1998）、岩波文庫『新日本史』上下（岩波書店2005）ほか。